

本書の論旨は、一読まことに明快である。したがって、それをここで繰り返す必要はないが、あえて一言で要約するならば、本書は、現代の日本社会が直面せざるをえない危機の本質を、その社会構造にさかのぼって科学的に説明するものだ。われわれ日本人の思想と行動が、相も変わらず「集団の機能的要請にもとづく、盲目的予定調和説と構造的アノミーの所産」にすぎないことが、この危機の根源である。

読者の方々の多くが驚かれたことと思うが、本書は十五年前に出版されたにもかかわらず、あたかもつい昨日書かれたかのように、新鮮である。著者の指摘は、現在の日本社会にもそっくりそのまま当てはまる。もちろんそれは、日本社会がこの間、本質的

解説

橋爪大三郎

本書は、小室直樹「危機の構造——日本社会崩壊のモデル」(ダイヤモンド現代選書、VIII—二三七頁、ダイヤモンド社、一九七六年一〇月刊)の再刊である。一九八二年には同じくダイヤモンド社から、同書をベースに「増補版 危機の構造」が出版されているが、今回はその増補版でなく、初版そのままを採録した。

*

1991-6
11/15

にわかりやすく書き改められたものであり、時局的な社会現象の分析も一部加えられている。

(小川三四郎・記)

戦前と戦後の連続性。この別名こそ「構造」なのだ。小室氏がこの主張を、戦後社会科学の文字どおり「正統」を踏まえて提出している点が、注目に値する。

小室氏は、アメリカ留学から帰国の際、東大大学院で政治学を研究。その時期に、丸山真男(政治学)、大塚久雄(経済史)、川島武宜(法社会学)、中根千枝(社会人類学)といった、戦後日本の最高レベルの学者たちから、直接教えを受けた。そうして吸収した戦後社会科学の精髓が、本書の随所に活かされている。

小室氏は、(1)個々の学問の枠にとらわれず、学問横断的な議論を展開する。そして、(2)論理性を重んじ、一貫した方法論にもとづいて議論を進める、という点で、稀有の人

*

人びともそう信じたかと思つた。戦後の思想界は、ずうっと、戦前/戦後の断絶史観に立っていたのである。

ところが小室氏は日本社会の構造が戦前とちつとも違つていないと指摘する。たとえば、商社マンの行動・思想は、帝国陸軍と瓜二つではないか。戦前社会が、坂道を転がるように破滅への道をつつたのなら、戦後社会も、同じ構造的な危機を免れないはずだ。

戦後思想の虚妄を明快に語つたという点で、『危機の構造』の登場は、八〇年代のポスト・モダンの台頭(戦後知識人の凋落)に先がけたものと言えよう。

な部分で変化していかないからだが、それよりむしろ、その変わることにない日本社会の本質を見すえ、日本社会の(危機の)構造を鋭くえぐり出している、著者の洞察をこそ賞讃すべきだろう。

*

本書は、一九七〇年〜七五年にかけて書かれた幾編かの論文が元になっている。この時期はちょうど、六〇年代を通じて高度成長をとげてきた日本が、ニクソン・ショック、二度のオイル・ショックという世界情勢の激変に直面して、それまでの行き方を見直し、新しい進路を模索していた時期にあたる。

当時の日本の人びとは(今もそうだろうが)、外部からおとずれる環境の激変そのものを「危機」ととらえた。それに対して、本書の著者小室直樹氏は、危機が日本社会に内在すると考える。外部環境の変化にうまく適応しようとすればするほど、かえって問題が深刻になる。この逆説こそ本当の危機が潜むのだと、本書は看破する。

なぜそうなるのだろうか。著者は、歴史にその根拠を探っていく。

*

戦前/戦後の日本社会は連続的なものだ、というのが本書の中心をなす指摘である。

戦前と戦後とは、まったく性質の異なった社会だ——そのように、戦後の知識人たちは主張してきた。敗戦を境に、日本社会は過去を払拭して、新しい段階に入った、と。

である。

右の二点は、社会をトータルに考察しようとするれば、ぜひとも踏まえなければならないことのはずである。けれども、並みの研究者にとっては、自分の専門で一人前になるのさえ、ひと苦労なのだ。専門分化が進んだ現在、複数の学問分野を股にかけ、縦横に議論をするなど容易でない。ところが小室氏は、持ち前の旺盛な探究心によって、それをあっさりやりとげてしまう。のみならず、それぞれの学問の限界も十分にわきまえたうえで、それらを総合し、現実を鋭く分析し、今後を大胆に予測する。余人には真似のできない仕事だと言えるだろう。

本書のつぎに著者が世に問うたのは、「ソビエト帝国の崩壊」(カッパビジネス、一九八〇年、光文社)だった。当時、ヘレストロイカの兆候など何もなく、逆に日本では、ソ連の軍備増強が心配されていた。そんな折しも、小室氏は、公刊されたデータやいくつかの学問上の根拠のみから、ソ連帝国の来るべき危機を、はっきり予言したのである。経済の恐るべき非効率と、民族問題。その後の展開は、まさしく小室氏が予測した通りであった。

「ソビエト帝国の崩壊」以降の読者は、小室氏の研究者としての側面を知らないかもしれない。まして、教育者としての氏を知らないに違いない。

私が小室氏のゼミにはじめて参加したのは、一九七四年の春だったと思う。ゼミと言ってもいわゆる「自主ゼミ」で、大学院の正規のカリキュラムではない。壊滅状態にある日本の「社会科学を復興する」ことを旗じるしに、社会学などを学ぶ各大学の院生などを相手にする特訓ゼミである。以来十年あまり、毎週一回、社会科学のさまざまな理論を学びながら小室氏と議論するのが、私の楽しみであった。

ゼミはだいたい、こんな具合である。朝九時、ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の講義が始まる。十時半からは、川島武宜「民法総則」をテキストに、法社会学の演習。昼休みを挟んで午後は、ヒックスの「価値と資本」、サミュエルソンの「経済分析の基礎」などを教材に、理論経済学の入門コース。線型数学や抽象代数学、数理統計学のコースも毎年のように開かれた。夕方からは、社会学、宗教学などのディスカッションを主体とする、アドヴァンストコースだ。

絵に描いたようなハードスケジュールだが、小室氏はどんなに疲れていても、白墨を手に黒板の前に立つと、とたんにシャキッとして、滔々と流れるような熱っぽい講義を繰り広げ、われわれを感嘆させた。学問に対する情熱という点で、小室氏の右に出る者を私は知らない。

長年のあいだこのゼミで教えを受けた者は、優に数百名を越えるだろう。大学で現在教授、助教授の職にある者も多い。変わり種では、TVキャスターに転じて活躍中の者

も何人かいる。一時、小室氏が体調を崩したあと、現在ゼミはお休み中だが、いろいろなかたちでこのゼミが学界に大きく寄与したことは間違いない。

いわゆる戦後知識人とは系譜が異なるが、昭和七(一九三二)年生まれの小室氏もまた、戦後精神を体現する知識人だろう。氏は、物理学、経済学、心理学を、「先進」的な学問だと考える。そこから、有益な概念セットや理論化のアイデアを持ち込んで、社会学の急速なレベルアップを図る。そのためには、優秀な才能と超人的なエネルギーを集中的に投下することだ——これが小室氏の作戦である。いかにも戦後復興期の、傾斜生産方式(資源を鉄鋼と石炭産業に集中させ、経済の急速な成長をはかるやり方)にそっくりではないか。

小室氏が念願してやまない、社会科学の「ブレイクスルー」(突破・ニュートンやアインシュタインみたいな、画期的な理論展望が開けること)が、先進的な学問を総合しさえすれば即、約束されるものかどうか、それは知らない。だがそれが、飛躍の必要条件であろうことは確かだ。学問に王道なし。オーソドックスに学問を身につけ、そのうえで、つねに問題の根本に立ちかえって、ものごとを解明していくこと。そういう原則的で科学的な態度を、小室氏は誰よりも強調し、自分でも体現している。本書にもその精神が脈々と波打っているのが感得されよう。

日本人がもっとも苦手とする、社会科学。その理由も、それを克服しなければならぬ必然も、本書には明瞭に分析してある。すでに古典と呼ぶにふさわしい本書が、文庫に収められ、新たな読者を獲得していくことを喜びたい。(一九九〇・一二・三〇)

*この解説を書きおえた今朝、「危機の構造」の編集を担当したダイヤモンド社の、曾我部洋氏が十二月二十二日に亡くなられたという報せを受けた(享年四十六歳)。小室直樹氏のみよき理解者であり、親友であり、記念すべき第一作の編集者でもあった、氏の冥福を祈りたい。

1991年4A3

高度消費社会における ブランド神話の真相

文ノ橋爪大三郎

●ブランドとは何か

ブランドとは、識別のための工夫。放し飼いの牛がよその牧草地にまぎれこんでも大丈夫なように、焼き印 (brand) を押ししておく。これで持ち主がすぐ判る。

見分けのつきにくいものを、ひと目で見分けられると便利だから、ブランドが生まれた。牛の群れであろうと、商品であろうと、その理屈は同じこと。製造元を表すロゴやマークも、ブランドとして機能する。

由緒あるフィレンツェの、貴族ご用達の馬具職人であったグッチ。王室御用達の高級品を納入した業者の、ロイヤル・ブランドの数々。手工業時代のブランドは、手がけた職人の誇り、品質保証の目印だった。誰が物を作り、誰がそれを使うかは、昔から決まっていた、好き勝手に変えることはできない。伝統的な身分制社会の生産様式、それがブランド本来のあり方である。

それが時と所をへだて、80年代日本の「高度資本主義社会」に甦った。ここでもブランドは相変わらず、識別のための工夫である。ただし、それが奉仕するのは、かつてとは異なる差異のシステムだ。

この社会でブランドは、一種の神話として機能する。さもないとブランドは、存続できない。日常生活は、ブランド物をどう選択し、どう着こなし、どう使いこなすかという宗教儀式に変容した。この儀式の戒律を守ることが、救済に至るための条件なのである。

ブランド商品を購入すること。それはブランド信仰の告白であり、またブランド神話を再生産する行為でもある。うたかたのように、現れては消える数々のブランドを支えるのは、人びとの宗教的エネルギーだ。このエネルギーの作用の仕方をつきとめれば、ブランド神話が現れ、また崩壊する必然を理解できるだろう。

●救済としての消費

ブランド神話が救済するのは、たてまえ上ごく一部の、選ばれた人びとである。たとえ誰もが、その救済にあずかることをめざすとしても。したがって、その前史として、無差別に誰でも救済にあずかれると約束した社会、つまり大衆社会の成り立ちに、目を向けておかなければならない。

産業革命は、伝統的な手工業の生産様式を機械で置きかえた。そして熟練を解体し、大量生産～大量消費を生み出した。この結果、都市に大量の消費者＝大衆が出現した。

財が稀少であるうちは、商品は作る端から売れていく。こ

はしづめ だいさぶろう
1948年鎌倉市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了。東京工業大学助教授。「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)など。



Photo KOJIN

く初期のころ、大量生産された商品を所有することは、産業文明と関わりをもっている証拠 (ハイカラ) であって、それ自身、価値あることだった。産業化の進展につれ、商品の供給が爆発的に増大し、財の稀少性が薄れていく。それらの商品を、人びとは喜んで買わなくなる。低価格の商品は、たちまち魅力がなくなり、人びとの購買目標は、より高価格の商品、より新しい機能をそなえた商品へとシフトしていった。それには、所得の上昇がともなわなければならない。高度成長の期間を通じて人びとは、物質的により豊かな生活をめざして、三種の神器や30などと、消費の標準バスケットを購入するため、働きづめに働いた。商品を購入することが、(幸福) を実現する道である——この信仰にも似た感情が、大衆社会の通奏低音である。

大衆社会は、人びとの間の差異を喰いつぶし、平準化へと向かう社会だ。一部に、ひと足先に豊かさを楽しむ人びとがいても、それは残り的大衆に手の届くものである。しかもそのキャッチ・アップに要する時間が、年々めまぐるしく早まっていく。

1970年を迎える頃までに、大衆社会を新たな段階に移行させる、2つの出来事が起こった。ひとつは、マルクス主義の権威が決定的に凋落したこと。マルクス主義は、社会を解説するもっとも権威あるコードだった。それは社会が、支配階級/被支配階級の2つの部分からなるとする。そして生産関係が、社会のあらゆる領域を規定するとみなす。この解説コードのもとでは、消費がその社会の人びと全員を救済するという教義は成り立たなかった。その歯止めが弱れた。

もうひとつは、60年代サブ・カルチャーが形を変え、社会の中で市民権を得たこと。大衆社会がユダヤ教と同じく、共同体救済 (みなが一度に幸せになる) の色彩が強かったのに対し、60年代の若者の異議申立てはキリスト教と同じく、一人ひとりの救済をめざす。彼らは、自己表現・自己実現のため、産業社会の成果を拒否し、ヨレヨレのジーンズやTシャツを身につけた。このスタイルは最初のうち、まだどこかでマルクス主義の解説コードを下敷きにしていた。ところが、それと絶縁すると、たちまちその世俗的な形態に移行した。自己表現・自己実現のために、消費社会の成果をとことん利用してもいい、いや、すべきだということになったのである。

このふたつの出来事が組み合わさって、消費による救済の神学、あるいはブランド神話が誕生した。それは、70年代から本格的に開花することになる消費社会の、根本教義である。

●選択の神話＝ブランド

消費社会に張りめぐらされるのは、差異のコードである。そこでは、ひとが何を購買＝消費するかよりむしろ、それが他人とどれだけ違っているかが主要な問題となる。

ある商品/別の商品、の差異 (対立) が、ある消費者の属性/別の消費者の属性、の差異 (対立) に等置される。この記号学的な原理が、ブランド神話の根本ロジックだ。消費者の属性——「個性」でも「自己表現」でもよいのだが——は、

特集／ブランド神話

それ自体で存在できない。とりあえず、ある商品／別の商品の対立を通じてしか、存在を確かめられないもの（消極的な存在）である。消費者の群れ＝大衆のなかに埋もれてしまった（自己）を（再）発見するために、別の商品ではないある商品を選択し続けること。このことを通じて、消費者は救済にいたる道を歩む。

ブランド神話の与える救済は、狭き門（選ばれた者だけが入ることを許される国）。他人と違った自分を確認し、満足することである。だが、神なき時代のこの救済の神学は、完結したものであるわけにはいかない。

まずこの救済は、絶対のものでない。比較の対象となる他人を、どうしても必要とする。自分の選択が他の人びとの目に触れ、他の人びとに是認されてはじめて、それが正しかったと確信できる。自分のほうでも、他の人びとが何を選擇したかを知っていなければならぬ。

それに、ブランドというものが矛盾がある。

ブランドは、他人との差異を確認するための媒体。それには、自分とそのブランドとの結びつきが必然的でなければならない。ところがその結びつきは、購買行動（その実態は消費者の恣意的な選択）によって生まれたものである。選択は、ほかでもよかったというみで、必然性を欠いている。だから、実態は選択であるのに、選択であることを隠蔽しなければならない。さもないと、自分の同一性が成り立たない。

ブランドによる救済。それは、狭き門である。身の回りがあるブランドで統一してみたり、さまざまなブランドを散りばめてみたりすると、それに対して、救済がおとずれるとしよう。それは、いつでも必ずおとずれると限らない。でもとにかく、救済を求めらるなら、商品を購入する必要がある。それは、教会信徒の献金箱のように、救済の列に並んだ者の印になる。

購入は、やみくもであってはいけない。

ブランドは、単品では存在しない。多く集まって、ひとつの小宇宙をかたちづくる。それらがどのように配置されているかの情報があってはじめて、選択が意味をなす。

この情報を、まず広告が与える。広告が振りまくイメージは、ブランド商品の本質的な一部分をなす。つぎに、二次情報としての雑誌が介在する。雑誌は広告と違って、ブランドを横並べし、選択のカatalog、配列のマニュアルとして機能する。雑誌の与える情報は、選択についての選択であるという点で、二次的である。さらに、人びとの消費生活それ自体の動向が、人びとの関心の対象となる。この関心は、自己言及的で、選択を増幅させる局面と減衰させる局面を持つ。つまりそれは、流行として現象する。

流行現象はもともと、自己を消尽するサイクルだった。流行するまで、それは流行でなく、流行してしまえば、それは流行遅れになる。古くからあったこの現象は、ブランド神話とも交錯せざるをえない。

●ブランド化

ブランド商品は、普通の商品よりも高価である。そして、その差額（付加価値）は、品質や機能のような商品の実質でなしに、デザインやブランド・イメージに対する対価である。商品の実質によらない差異が、ブランド神話の流通させる価値である。

差異を求めるエネルギーが、70～80年代の日本には渦巻いていた。高度成長を通じて倍増を続けた所得には、付加価値の部分に回せるだけの余裕があった。特に日本で出現した極端な大衆社会状況は、ブランド神話の潜在的な信徒にことかかなかった。

ブランド神話の背景には、ますます増大する選択可能性がある。それは、産業社会が成熟し、社会の機能分化がいつそう進行したことの帰結だ。

この社会では、まず人間が、置き換え可能なもの（つまり、社会システムからみて選択可能なもの）になる。企業の側から見て、社員一人ひとりの人格や個性は問題にならない。産業社会を生きる人びとには、自分がいつ他人と置き換えられてしまうかわからないという、自己喪失の不安が根底にある。自分が自分を見失うばかりでなく、自分と他人の具体的な関わりも見えなくなる。自分と他人の表面的な差異に、異様にこだわらざるをえなくなるのが、ブランド化だ。

たとえば、大学のブランド化。学歴を重視するのは、産業社会なら当然だ。だが70年代以降、それが教育歴ではなく、学校歴になってしまった。どの大学卒かでひとを判断するのを、スクリーニングという。実際どんな人間か判断する手間を省いて、あの大学なら大丈夫だろうと、企業の人材パーツとしての一定の品質を期待する。それが、企業を離れたさまざまな社会生活の場面でも、その人間の評価にはねかえっていく。

それが、もうひとつの重要な選択の場面、結婚でも問題になる。この場面では、誰でも互いを、置き換え不可能な自己と他者として発見できなければならない。にもかかわらず、そのプロセスが省略されて、学校歴や会社の知名度、年収、身長といった、カタログ的なデータがスクリーニング機能を果たすようになる。同時に自分も、そうしたカテゴリーでしか自分や他人をとらえられなくなる。

ブランド商品を購入＝選択することによって、かけがえない自己を（再）発見しようとする衝動にも似たエネルギーは、このブランド化の一環として生じたと考えられよう。その根底にあるのは、自己同一性をめぐる疑問だった。社会と自分の関係、自分と他人の関係が、選択に任される偶然的なものとなった。そこで自分を、恣意的な選択とは違った何ものかにつなぎとめるために、ブランド商品が利用されたのである。

しかし、これは、成功を約束されない解決というべきだろう。

ブランドで自己同一性を確認したいと思えば、ブランドが流行から絶縁していなければ具合が悪い。流行は、右往左往する大衆のうみだすもの。それに対してブランドは、生まれ育ちの良さ、一朝一夕に身につかない洗練されたセンス、有名人など選ばれた人だけにそなわる気品といった、市場の外部に起源をもつ物語を含蓄する。ところが実際には、ブランド品は金さえ出せば誰にだって買えるし、マニユアル雑誌を見れば誰にだって着こなせるのだ。店頭価格の値崩れを抑え、買物を監視し、ブランド・イメージを守ったとしても、ブランド・ビジネスが商業主義（市場の論理）で動かされていることはまぎれもない。あるブランドが流行れば、別のブランドが廃れるということもあろう。いやそれどころかそもそも、ブランド現象それ自身が、大衆に支えられた流行であったともいえる。ここから考えても、ブランドと流行が絶縁できるわけなどないのだ。ブランド神話は、いずれ崩壊への道をたどる以外にないものだった。



Photo K OJITA

●脱・ブランド神話

ブランド神話は消費者が、市場の動向に依存しない自分の同一性を確かめようとする、言ってみれば空しい努力だった。ブランド信者が求めているのは、永続する同一性。それは、喪なわれた過去に属する。デジャ・ビュのような、秘密を暴露しようとする視線に耐えないはかなさ。ブランド商品がたえるのは、過ぎ去った時代のイメージの蜃気楼なのだ。

ブランドは、商品－人間の結びつき（選択）を間接化した。個々の商品（単品）を選択するかわりに、商品のグループ（ブランド）を選択する。この工夫は、消費者にとってもメーカーにとっても、違ったみで利益になった。

だからブランドそのものは、なかなか廃れないに違いない。けれどもそれが、救済の神話をつむぎ出す時代はもう終る。ブランド商品がしよせん、借り物のアイデンティティを与えにすぎないことは、最初から誰だって気付いていた。なん

だこんなもの、と思いつながら、ブランド商品を買わないで、ではどうすればいいかわからなかっただけだ。

宗教儀式としてのブランド神話は、ゆえに、その最初から形骸だった。それは、購買行動による自己確認という、消費社会の世俗化された救済の幻想であった。ここからの脱出を試みる方法論——産業社会から脱出するエコロジストのライフ・スタイルや、未来を志向するハイテク的ライフ・スタイル——は、大部分の人びとを巻き込むに至らないだろう。そのかわりに、徐々に起こりつつあるのは、手軽に買えるブランド商品に依存しない差異化の方法、知識財～ソフト財へのシフトである。

ブランド神話の時代は、消費優位であるように見えたとはいえない。実は、生産組織・労働現場で人びとが自分の独自性を発見できないでいる、というところに根があった。ブランド信仰は、敗者復活戦に似ている。自己表現に長けた人びとは、もともとそういうものに引きずられたりしない。変容を続ける資本主義のもとで、人びとがどのように自分を再発見しようとするか。そこに、ブランド神話のつぎに何が来るかがかかっている。

1991-6 6/15

旧日本軍隊の現実の前に 社会科学は無力なのだ

日本人だからといって、日本のことを分かっていないなどと錯覚してはいけません。それは子供が、子供のことをちっとも分かっていないのと同じだ。だから、われわれは「日本人論」を読み、自分が何者かを学習しなければ

日本論を解読する

ダサンという正体不詳のユダヤ人(?)が書いた、『日本人とユダヤ人』(角川文庫・三九〇円)がベストセラーになった。ユダヤ人と対照して日本人を描く手法は、なかなか新鮮だった。著者と連絡をとることができたのは、山本書店主の山本七平氏だけだったのだ、どうやらベンダサンは、氏のペン

る。砲兵将校としてフィリピン戦線に従軍した経験から、日本人のつくる組織を鋭く分析した『二下級将校の見た帝国陸軍』(文春文庫・四二〇円)。それを日本の意思決定メカニズム一般に敷衍した『空気の研究』(同・三六〇円)。とりわけ重要なのは、幕末維新の尊皇攘夷思想がどのようにに成立し

的な試みである。日本がたった百年かそこらで近代化してしまい、経済大国にのし上がったのはなぜか。この謎は、いろいろに考えられてきた。マックス・ウェーバーは、西欧が近代化した条件として、宗教的なエートス(行動様式)の重要性を強調している。しかし日本では、宗教の社会的な影響力たるや微々たるものなので、説明に窮してしまう。

日本人の自己理解の甘さが情けなくなる 世界の問題児になるのは理の当然

橋爪大三郎

社会学者。一九四八年神奈川県生まれ。著書「はじめての構造主義」など

ばならないのである。ただし、外国人なら日本をよく分かるかという点、そういうわけでもない。それなのに日本人は信じやすく、外国人の書いたものを有り難がる。ルース・ベネディクトの『菊と刀』(現代教養文庫・五二〇円)このかた、横文字の日本論が読みつがれてくる。

ネームらしい。だいたい経ってから、浅見雄『にせユダヤ人と日本人』(朝日文庫・四五〇円)という本が出て、ベンダサンの本がどんなに出鱈目かを暴露した。読んでみると論旨は説得的だし、ベンダサン側も反論しなかったから、浅見氏が正しいのかもしれない。

たのか、その起源を山崎闇斎の学統(崎門学)に求めた『現人神の創作者たち』(文藝春秋・一八五四円)。山本氏の強みは、ユダヤ・キリスト教神学特有のねばりつくような人間洞察でもって、日本人の無自覚な行動前提をあぶり出す技術に長けている点だ。小室直樹氏との対談『日本教の社会学』(講談社・絶版)も粗削りながら、日本の組織神学を構築しようとする意欲

丸山真男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会・二八八四円)は、ウェーバーの仕事も参考にして、江戸儒学のなかに自生的な近代化の芽を見つけようとした野心的な試みである。丸山氏が注目したのは、荻生徂徠の学統(徂徠学)だった。そして彼の政治思想に、近代社会に不可欠の「作為の契機」(人びとの意志によって社会制度を作り出そうという姿勢)が認められ

るとした。あまりに堂々とした業績なので、その後の研究に圧倒的な影響を与えたけれども、難点もある。徂徠学はその後、明治維新の際に、何の役割も果たさなかった。むしろ決定的な役割を果たしたのは、山本七平氏が注目しているように、崎門学なのである。丸山氏もこの点を気にして、岩波の日本思想体系31巻『山崎闇斎学派』(品切れ)の解説で説明を試みているが、どうも要領をえな。



昭和天皇死去の報を知り、皇居前広場を埋めつくす記者(1989年)

米誌の分析に接して思っ 自己客観化の不足

K・V・ウォルフレン『日本/権力構造の謎』(上下・早川書房・各二四〇〇円)は、日本の社会実態を「ヘンステム」と呼ぶ。西欧的な意味での「人間」不在、意思決定不在の「ヘンステム」。欲望や世界観まで集団に管理される、昆虫社会のような不気味な感触を表す言葉だ。そしてこの本の強みは、それを単なる感触に終わらせないで、徹底的に日本人を取材し、われわれも知らなかった事実の積み上げによって論証していることである。

社文庫・四八〇(五四〇円)は、日本人のつくった組織(党)の、別な意味での極限状態を再現している。日本人はなぜ、社会を作る原理・原則が、西欧世界の人びとと異なるのか? この点が、よくわからない。

日本論を解読する

私は、まったくウォルフレンの言う通りだと思う。この本は、外国人が手軽に日本社会を知るための、定番となるだろう。そして重要なのは、日本を奇妙で異様な社会と見る、その視線のあり方である。発達した産業社会なのに、そして技術水準も高いのに、政治や経済の運営の仕方が外部の人びとにはよく分からず、自分たちだけの殻に閉じこもっている。日本が「特殊」で国際性を欠いた、問題の多い社会であるという認識が、これからはますます海外の人びとに共有されていくだろう

空 飛 ぶ 世 紀 末 注 意 報 !

ウォルフレンド氏は、戦後日本社会に
的を絞っているが、ほぼ同じ手法によ
って、明治、戦前期の日本を丹念に押
さえた本としては、J・G・ロバーツ

『三井——日本における経済と社会の
三百年』(ダイヤモンド社・絶版)が
ある。この本は、三井文庫そのほかの

資料を駆使して、戦前最大の財閥の動
きに焦点をあて、近代日本の財界・政
界・軍の結びつきがどのように形成さ
れて行ったかを実名のレベルで追い
かけたもの。わずか一冊の書物である

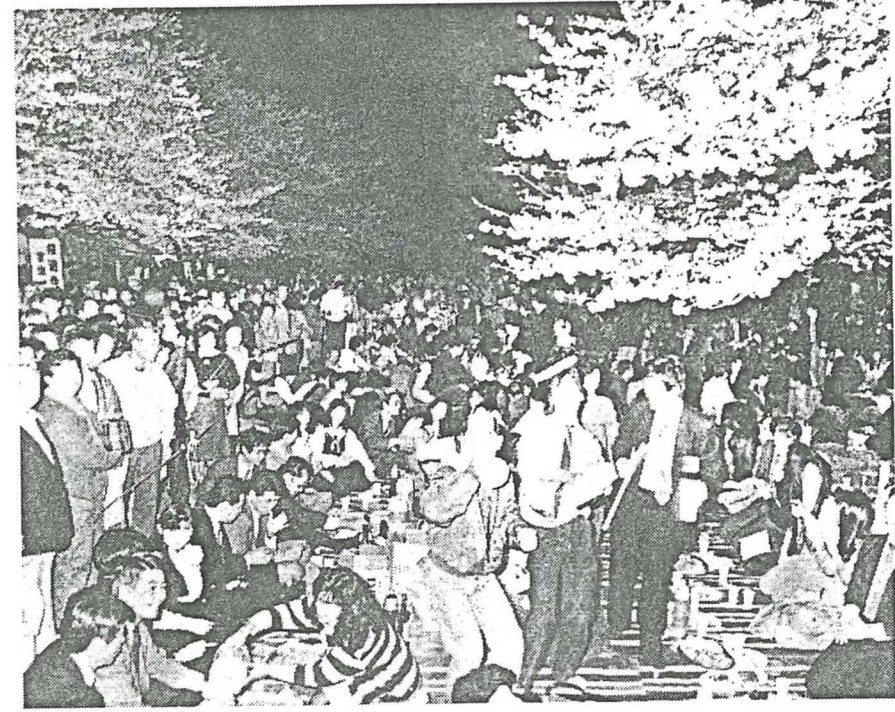
が、日本近代の現実がくっきりと浮か
びあがってくる。こういう実証的な執
念が、日本のジャーナリストや歴史家
に欠けているのはなぜだろう。

外国人であることの利点を痛切に感
じさせるもう一冊は、フォーチュン編
集部編『大日本帝国』の研究(徳間
書店・品切れ)だ。

これは、太平洋戦争開戦から二年あ
まり経った一九四四年四月、早くも日
本の敗戦を見越して、戦後処理をテー
マにした雑誌の特集号の翻訳である。

データの精度はともかく、分析の骨格
ががっちりしている。そのため、当時
の日本人に思いもつかなかった、その
後の戦局の推移や、戦後日本の復興プ

ロ・ベラー他
島田進・中村圭志訳
アメリカはどこへ行くかとしてい
るのか? 本書は『アメリカの民主
主義』を著わしたトクヴィルの
ことば(心の習慣)を鍵に、人々
が個人主義を掲げながら結局孤独
になり孤立していくのはなぜか、
そのライフスタイルを探る。自由
な諸制度の存続にかかわる、私的
な生活と公共的生活の関りのあり
かたを問う衝撃の問題作。¥3914



夜桜見物や宴会を楽しむ
人、人、人の上野公園

日本論を解読する

ランが、これほど早い段階で見事に予
測できている。
天皇を中心とする国家体制、民主主
義が未発達であること、財閥の経済支

配、軍部の横暴、貧困な農村、硬直し
た教育……。これらを、太平洋を隔て
て冷静に見つめ、分析する視線に触れ
ると、日本人の自己理解の「甘さ」が

情けなくなってくる。自分を客観化す
ることがどうも下手なら、再び日本が
世界の問題児になるのは、理の当然と
言えよう。この視線は、現在のイラク
を見据えるアメリカの視線でもある。

日本も、かつてのイラクと同様、狂気
じみた支配者に導かれた民衆が、無謀
な排外主義に結集したのだ。戦後半世
紀が経ったが、その視線は忘れられ
ない。日本人がその過去を忘れただ
けだ。

倫理もない観察眼もない 日本論だけが多すぎる

中谷巖『ジャパン・プロブレムの原
点』(講談社現代新書・五五〇円)は、
日本人が自らの手で、日本社会の実態
を問題として別り出した好書。これ
は、将来の本格的な理論編に備えて、
ひとわたり現象を記述してみただけの
「原点」だというのが、ここでの指摘に
私は賛成する。八〇年代に、京都学派
の人びとを中心に、日本社会の優先を
唱える論調があったが、私にはとても
賛成できなかった。湾岸戦争でのどた
ばたぶりに、世界中がその思いを深く
したに違いない。

日本の社会構造を、ニュートラルに

アフター5の5冊

青春とは一種の能力だ 荻野アンナ 作家



青春って何だろう。森
田健作のような特殊な例
は別として、青春に目尻
の小ジワは似合わない、
と思うでしょう? とこ
ろがどっこい、実際に目
尻に小ジワの似合う年になってくると青春
は年齢の問題ではない、ということがわか
ってくる。青春とは一種の能力だ。

落ち込む能力。とことんまで落ちること
の出来る精神的な体力。これが無ければ若
くして心は養老院で日向ぼっことなる。で
は、朝に目覚めたことを呪い、息をするの
も辛く、重力が自分の頭の上だけ2乗にな
っているのではないかと疑い、夜の孤独に
ナメクジのようにいじける私はもしかして
青春まっ盛り?——と苦笑しているあなた。
読むなら下手に中途半端にユカイにな
るものよりは、青春の密度を濃くしてくれ
るような手ごわい奴はどうでしょう。

元気の素に坂口安吾『風と光と二十の私
と』(講談社文庫・800円)。暗さもここま
でくるとドンデンが来て、いっそ明るいつ
げ義春『ゲンセンカン主人』(双葉社・830
円)。夢もチボーもない現実をクールに描
ききってなぜかホットな『ラサリーリョ・
デ・トルメスの生涯』(岩波文庫・260円)。
メゲて自主休講の午後は唯野教授の講義を
聴き『文学部唯野教授』(筒井康隆・岩波
書店・1300円)、夕べにフライパンを握る
気力も無ければ『セイシュンの食卓』シリ
ーズ(全5冊・たけだみりこと東京ブリタ
ニアン・メディアファクトリー・900~906
円)の大胆手抜き料理でリキをつける。こ
れで明日も目一杯『青春』できますねっ
(おぎの あんな)

最初の発表は六〇年代の半ばで、衝
撃をもって受け取られた。日本民俗学
の成果を、現代社会のあり方とどう結
びつけていくかは、手付かずの課題で
ある。

日本社会の伝統を象徴する天皇と、
戦後民主主義の拠り所である憲法。そ

の関係を考えてみたものとして、私の
『冒険としての社会科学』(毎日新聞
社・一三〇〇円)がある。あわせて読
んでいただければ幸いだ。

日本について論じた本は、山ほどあ
るわけだが、記述をどこまで普遍化で
きているかが問題だ。論理もなく観察
眼もなく、ただ現象を撫でただけの日

本論が多すぎる。そういうものは読み
捨てよう。

願わくは、日本の制度改革に結びつ
き、日本人の心性(行動パターン)を
改めることのできるような、倫理性の
高い日本社会論の登場を待ち望みた
い。

(はしづめ だいさぶろう)

心の習慣

アメリカ個人主義のゆくえ
R. ベラー他
島田進・中村圭志訳
アメリカはどこへ行くかとしてい
るのか? 本書は『アメリカの民主
主義』を著わしたトクヴィルの
ことば(心の習慣)を鍵に、人々
が個人主義を掲げながら結局孤独
になり孤立していくのはなぜか、
そのライフスタイルを探る。自由
な諸制度の存続にかかわる、私的
な生活と公共的生活の関りのあり
かたを問う衝撃の問題作。¥3914

「まち」のアイデア

ローマと古代世界の都市の形の人間学
J. リクワート
前川道郎・小野育雄訳
高層住宅、緑地、図書館、網の目
の交通空間。住宅と余暇と労働と
交通の機能運来から成る現代都市
は、果たして人間の棲み家といえ
るのか? 著名な建築史家が、古
代ローマを軸に、家・都市・宇宙
を貫くコスモロジーに人間の場を
さぐり、「まち」のアイデアを読む。
都市の表面から深層に切り込んだ
挑発的な都市論=神話論。¥7004

エッフェル塔

ロラン・バルト
写真 A. マルタン 花輪 光訳
エッフェル塔を天と地を結ぶ橋と
みごとに定義し、意味生成を無限
に行なう空虚な記号(象徴)とす
ることによって、バルトはこのモ
ニュメンタルな建造物の記号論を
創始した。本書はこの画期的なテ
クストに加えてナダール賞マルタ
ンの傑作写真55点を収め、鉄の時
代の幕開けを告知する近代的オブ
ジェの全体を明示する。 ¥5974

幻想画家論

コレクション瀧口修造1(第2回)
ボッス、グリュネウワルトから
クレー、デュシャンに至る異色の
作家群を論じた完結的業績をはじめ、
批評実践における転機を刻印
する1958年のヨーロッパ紀行(プ
ルトンとの対話やヴェニス・ビエ
ンナーレの意義等)を収録。さら
に「自筆年譜」を中心に自らの軌
跡を辿り、詩人=批評家の内実を
開示するエッセーを併収。 ¥5974

東京文芸本郷 3丁目17-15 みすず書房

1991-6
8/15

『戦後史大事典』(1991年3月1日発行)三省堂

「黒幕」が操る自民の異常政局

東工大助教授社会学
橋爪大三郎

NHK労働、全国ガス、全印刷が磯村氏支持を表明。だが、自治労、私鉄総連など旧総評系の多くが社会党陣営にとどまり、山岸氏の言動には当然ながら「裏切り行為だ」との批判も出た。そんな山岸氏が、戦いが終わった今、連合の中で追及する声は、とんと聞かれない。それどころか、三月末に

は、旧総評系労組の全委員長が集まって「山岸氏を励ます会」を開いた。その席上、選挙後にしこりを残さないことが確認された。なぜこうなったのか。連合幹部は、こんな解説をする。「社公民連四党が統一候補を立てられず、連合は各労組の自主対応を決めた。だから、連合自体は選挙に関係な

い。それに鈴木都知事の優勢が伝えられ、みんな、やる気がなかった。政治的カンの鋭い山岸氏が、選挙の行方や一部労組の不満を見越し、早々と選挙から身を引いたんだ」かくして山岸氏は、各党のごたごたに高みの見物を決め込んでいる。朝日新聞政治部・青木康晋

自民・公明・民社三党推薦の磯村候補が惨敗した。この責任問題は、どう決着するのが正しいのか。原則論からいって、政権政党は国会を基盤にしているのだから、地方選挙の結果に責任をとる必要はない。

えて磯村氏擁立を決定したのなら、それはそれでとどめる。問題は、この判断が適切だったか、この間、海部首相は何をしていたのか、であろう。

あいまいな責任所在

政局運営の焦点が首相になく、幹事長にあることが、そもそも異常である。リクルート事件で退陣した竹下首相は最大派閥の領袖として、首相をロケットのように操ることのできる影響力を残したと思った。そこで選んだのが、同じくリクルートの波を被った派閥のリーダーでなく、適当に無能な小粒の政治家たちだった。これが、責任の所在のさっぱりわからない、現在の異常政局を生んでいる。

もともと自民党政治には、この種の分かりにくさがつきものだ。中選挙区制のため、自民党は必然的に派閥の寄り合い所帯となる。最大派閥のリーダーといえども、他派と妥協や譲歩を重ねなければ、首相の座に座り続けることはできない。

そんな自民党では、なにかの事情で最大派閥から首相が出なければ、たちまち首相を操る政界の陰の実力者が現れてしまう。ロッキード事件以後の田中角栄氏がそうだったし、宇野・海部政権の竹下氏がそうである。こういう体制が、国民に対して責任をもつ民主主義の原則と相入れないのは、いうまでもない。

日本の政治は伝統的に、制度外の権力を容認する傾向があった。現に働いている権力が、歯止めなく制度化に転化する。院政や幕府政治がそうである。西欧世界にも「黒幕」はいる。けれども彼らは、決して公の場に現れない。正統な権限のない場所、意思決定がなされたらスキャンダルなのだ。派閥がなかば制度化し、各派「事務総長会議」まで定例化している日本は、西欧の目には異様に映る。

の可能性を切りひらく契機となりうるものであった。構造改革論の否定は、社会党の衰退と陳腐化の出発点になった。

正村公宏

構造主義

近代言語学や現代数学をモデルに、人間の精神の隠れた秩序をあきらかにしていこうとする思想運動を構造主義という。

フランス構造主義の本格的な影響がわが国におよんだのは、一九六〇年代の後半からだった。ソシュールの思想は戦前、時枝誠記によっていち早く紹介され、時枝『言語過程説』として言語学界に新風を吹きこんだ。それが三浦つとむのような教条にとられないマルクス主義者によって、戦後独自の記号学に展開されたことも見逃せない。この問題意識は、吉本隆明の『言語にとって美とは何か』にもうけつがれた。この流れをわが国の内発的な構造主義運動とみることもできる。

一方、レビーストロースの構造人類学も、五〇年代から注目を集めていた。たとえば、大林太良の論文『オナリ神をめぐる類

化と対比などは、きわめてはやい時期のものである。これは吉本隆明の『共同幻想論』や『南島論』にも影響した。英米系の機能主義が主流だった人類学界において、山口昌男の『道化の民俗学』、『人類学的思考』などは、象徴体系を構造主義的な技法(中心/周縁図式など)によって考察する、先駆的業績として評価が高い。

六〇年代の末ごろから、構造主義の紹介がにわかに増加し、最初はおもに、伊東守男、田島節夫らのフランス文学・思想の研究者によって、レビーストロース、E・リーチ、R・ヤコブソンの小論文や紹介記事が翻訳・紹介された。そのあと、北沢方邦の『構造主義』、中村雄二郎の『知の変貌』のような、もうすこし本格的な業績も出はじめた。なかでも特筆すべきは、丸山圭三郎の『ソシュールの思想』である。これは、構造主義の最大の源泉であるソシュールの記号論を、原資料にまでさかのぼって綿密に校訂・再構成した第一級の業績で、わが国の構造主義理解の水準を一挙に高めた、記念碑的な労作である。丸山は、

この仕事を踏まえて、さらに独自の記号・文化理論を展開させている。

七〇年代の後半以降、構造主義は、ほぼわが国思想界の理解するところとなった。が、フーコー、ラカン、デリダ、ドゥルーズ、クリステバといった、構造主義を踏まえつつも、それを批判し乗り越えようとする仕事がよくやくさかんに紹介されはじめると、人々の関心も構造主義よりはずり、それ以降の展開へと移っていった。とくに、思想、歴史、哲学に対しては、フーコーの『言葉と物』、『臨床医学の誕生』、『監獄の誕生』、『性の歴史』、デリダの『声の現象学』、『グラマトロジー』などが、大きな影響力をもった。

構造主義との決別が強烈に意識されたのは、浅田彰の『構造と力』が出版された八〇年代の前半である。この書は、構造主義批判の紹介書として画期的な影響力をもち、中沢新一らポスト構造主義と称せられる、新しい世代の一群の人々の台頭をうながした。

その一方で、構造主義の方法を現実分析に生かす試みもつつげられていた。たとえば上野千鶴子の『構造主義の冒険』や、とりわけ『記号の神話学』は、古代王権の存立機軸の分析としてすぐれている。人類学界では構造主義の潮流もしだいに優勢となり、未開社会の交換のあり方や、神話、象徴の研究にみるべき成果をあげている。そのほかにも、法学、社会学、生物学などに、構造主義の直接・間接の影響を受けた多様な研究が積み重ねられていく。構造主義は明確な分析手法をもっているため、それを欠くポスト構造主義にかえがたいものがある、といえよう。このように、構造主義はわが国でマルクス主義の退潮と交代するようになり、影響力を強め、思想界の一角に地歩をきずいてきた。しかし、わが国独自の展開がどこまで試みられたかとなると、かならずしも十分といえない。今後多くの課題を残していると考えられる。○ポスト・モダン 橋爪大三郎

【参】ピアジェ『構造主義』滝沢武久・佐々木明訳・文庫クセジュ白水社一九七〇、橋爪大三郎『はじめての構造主義』講談社現代新書一九八八

1991-6
9/15

大川隆法の「幸福の科学」が、瞬く間に百万を超える信者を獲得し、オーム真理教も依然として世間の関心を集めている。このように宗教が、多くの若者の心を捉えているいっぽう、まったく関心がないという顔をしている人びとも大勢いる。日本人はいつたい、宗教性に富んでいるのか、それとも、根っから宗教に無関心なのだろうか？

日本人は、宗教を信じやすいとも言えるし、ちっとも信じようとしなくても言える。一見正反対の傾向があるわけだが、実は両者は、同じ根から発したものである。そのことを理解するには、宗教とはどういうものかをおさらいしてみるとよい。

私の定義によると、宗教とは、「人間を超越するなものか」の存在を、人びとが共通に前提してふるまうことである。人びとの共有する前提が、社会生活をコントロールする規則である場合、それは法律だし、自然界を支配

「宗教」である間は、 宗教はだめ

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

する法則なら、それは科学だ。そして、前提するのが人間の霊魂や神や死後の世界であれば、それは宗教だと言える。

日本人はずっと、宗教は「死後の世界」を扱うものだと思いつてきた。これは、江戸幕府の政策によって、仏教がすっかり骨抜きにされ、葬式仏教になってしまったことの結果である。死後のことにしかタッチしなければ、宗教と、人びとの現に生きる現実社会との関わりは断ち切られる。こうして、宗教と現実社会とが切り離されたからこそ、宗教を軽くみるという、日本人に独特の傾向が生まれているのだ。

官僚も、政治家も、知識人も、ビジネスマンも、責任ある立場にある日本人は、だいたいにおいて、本気で宗教に関わるなど、精神的に未成熟な人間のことだと、どこかで考えている。世の中を十分に理解すれば、宗教など

信じないですむはずだと思っている。自分は何も信じていないと考え、無宗教であることを誇りにする人びとが多い。そのため、日本人は、一見するときわめて現実主義的であるかのような印象を与える。

けれども、日本人の考え方は、現実主義にしては中途半端で、本物ではない。本当の現実主義は、徹底してありのままの現実を見すえ、どういう他者が何を考えているかについて、冷静で客観的な像を作り上げるものだ。しかし、日本人は一般に、そこまで透徹した世界像をつくりあげようという動機に乏しい。やはりそれには、ユダヤ教やキリスト教のような、絶対の神の存在が必要なのだ。神の視線に晒されるからこそ、客観的な事実が浮き彫りになり、自分や他者たち(人間)の誤り(主観性)を指摘することもできる。神の存在はフィクションである。それは、社会のなかに、誰の利害や思惑か

らも独立した情報の秩序を打ち立てようとする技術である。政治も経済も法律も、ジャーナリズムも、ヨーロッパの文明の生み出した近代的な制度はみな、そうした技術を下敷きに成り立っているのだ。

いっぽう日本の社会は、もっと別の技術で動いている。それぞれの集団が目一杯に自己の利害を守り抜こうとする、局部的(ローカル)な技術の寄せ集めだ。どの集団も、既得権を守り、集団の存続をはかることしか考えていない。そうした利己的な行動をとっていると、社会が全体としてどういうことになってしまおうのか、まったく思い及ばない。

日本人の場合、宗教に対する関心が薄いように見えるのは、自分の属する集団のほうを宗教よりも重視せざるを得ないからである。社会は、いろいろな集団からなっている。誰もが自分の属する集団を重視するなら、そうした

集団を越えた、人びとの共通な行動前提(宗教)を成り立たせるのは当然むずかしくなる。

日本では、毎年かずかずの新興宗教が生まれるけれども、日本社会を根底から作り変えるほどのパワーを発揮するものは見当たらない。なぜならどれも、これまで日本人が考えてきた宗教の枠のなかに収まっていて、政治や経済、法秩序についての具体的なプランを持っていないからである。人びとの行動前提全体を、組み換えるまでの射程を持っていない。そうした宗教はいくら出てきても、現実社会にタッチしないというこれまでの「棲分け」を、踏み越えるものではない。

かくして新興宗教は、よくても概ね国民の10パーセント足らずに受け入れられたところで、頭打ちになる。既成宗教教団の反撥や、宗教を軽視する社会の壁に阻まれて、ただの「宗教」に終わってしまうのである。

五十嵐氏殺害事件に怒る

橋爪大三郎

筑波大学の五十嵐一(ひとし)助教が殺害された。犯人の手がかりは、まったくつかめていない。

報道から判断すると、プロの仕業だと思われる。夜間の犯行がいかに手慣れており、遺留品もない。事前に準備を重ね、目撃者の少ない時間帯を選んで、犯行に及んだのであろう。

しかも、最近イタリアで、同様の手口の事件があった。被害にあったのは、やはり『悪魔の詩』を翻訳したエットーレ・カプリーオー氏。幸い命は助かった。五十嵐氏もこの報に、身辺の警戒を強めていればと悔やまれる。

『悪魔の詩』出版がホメイニ師の怒りに触れ、著者サルマン・ラシュディ氏に死刑の宣告が下されてから、同氏はロンドンの隠れ家で、厳重な警護のもとに生活している。ホメイニ師の没後も、死刑宣告が依然有効であるといい、暗殺団が送りこまれたとの噂もある。

れと類似の翻訳を引き受ける人間はいなくなるだろうし、『悪魔の詩』を擁護する見解を雑誌に発表することさえはばかられるようになる。確実にその分、日本語の知的空間は歪まざるをえない。

*

こうした意図をくじくには、この事件にもめげず、日本の知的な言論の空間を歪めないこと、これしかない。日本語を話し、日本語でものを考えるわれわれすべてが挑戦を受けたのである。この事実に対して怒ると同時に、適切なすべての手を打たねばならない。われわれは『悪魔の詩』に反対する側の人びとの発言を含め、すべての人びとに言論の自由を保証してきた。このやり方は、擁護するに足るものである。それが、別のやり方に比べて、正当性を主張できるものなのは明らかだ。

翻訳を手懸けた版元は、すぐさま、どのような困難があろうと出版を続けると表明した。まことに正しい。勇気ある人びとを孤立させてはならない。

打てる手は、三つある。

- ①徹底的な捜査を行ない、事件の真相を解明する。
- ②書きたいことは書き、出版をびびったりしない。
- ③この事件のことを、国民が心底から怒る。

事件の解明は、捜査当局に任せるしかないが、内閣調査室や公安担当者も動員して、全力で当たるべきだ。真相と

今回の事件がどれほど重大な意味をもつのか、日本人はあまりピンと来ていないのではないか。

これは単なる殺人事件ではない。もしも想像される通りに、五十嵐氏が『悪魔の詩』を翻訳したことへの報復として、組織的に仕組まれた犯行だとすると、言論の自由に対する最大級の挑戦だと言わなければならぬ。

注目すべき個人的なイスラム学者として、五十嵐氏にはかねてから敬意を払ってきた。縁あって、氏の著書を書評したこともある。その五十嵐氏が、『悪魔の詩』を翻訳した。中東の事情に詳しい氏のことゆえ、危険を重々承知のうえで引き受けた仕事に違いない。『ニューズウィーク』の報道によれば、翻訳者が氏に落ち着くまで五人に断られたという。氏は、出版の意義を認めた書物を、勇気をもって翻訳し、それがもとで斃れたのだ。——真相が明らかでない今、そう断定はできないが、状況はその可能性がきわめて大きいことを示している。

今回の事件は、特定の書物(の翻訳)を日本人が読む必要はないし、読むではない、と考える人びとが存在する可能性を示している。彼らは、われわれが何を讀み、何を考えるかを左右しようと思図しているのだ。もしわれわれが、今回の事件の真相を解明できなければ、彼らの不当な意図が達成されてしまうことになる。その結果、今後こ

は何も、犯人を捕まえることと限らない。「個人的怨恨」などではないことの裏付けを取るのも大事である。

②は容易でない。すぐ「自粛」しがちなわれわれは、体を張って言論の自由を守るつもりがないのかもしれない。身の安全が保障されれば言いたいことを言い、ちょっと危険になると口をつぐむのは、言論の自由でも何でもない。

だから③が大切だ。怒るのに、金は一銭もかからない。なるべく派手に騒ぐ。そして、この問題に関心をもちつづけ、事件のその後を粘り強くフォローするのだ。

*

事件が起こった七月十二日、海部首相はサミットに出席するため、日本を離れていた。彼には絶好のチャンスが控えていた。この事件のことを、「目下捜査中だが、もしも組織的な犯行なら、言論の自由に対する重大な挑戦と受け止める。わが国民は、こうした事件を決して許さず言論の自由を守り通す決意である」とのべればよかったのだ。でも、こんなセリフを到底思いつかない。西側世界と価値観を共有するとのアピールが、いまだそれほど大きな政治的・外交的意義を持つか、彼にはわからないのである。

起こってしまったことは、取り返しがつかない。けれどもそれに、最善の対応をすることはできる。五十嵐氏の勇気ある選択に、もうひとつの勇気で応えるのは、われわれの責任だ。

(はしづめ だいさぶろう・社会学)

1991-6
11/15

論文のデータベースも試作しているが、英文で発表された日本の業績はほとんど皆無で、データベースにもごくわずかが登録されているだけ。日本語の文献は、海外に全然知られていない。世界のポピュラー音楽についてまとめた概説書や事典類でも、日本関係の部分はまったく手薄なのが現状だ。今回の『JPMガイド』をきっかけに、かなり事情は改善されよう。ところで、日本のポピュラー音楽は、英語圏でヒットしない代わりに、中国、台湾、香港、シンガポール、フィリピン、インドネシア……といったアジア圏ではそこそこ流行している。「北国の春」「恋よ」「昴」などが人気だ。日本のポピュラー音楽事情を紹介する雑誌やラジオ番組も盛んである。これは、逆の「一方通行」であろう。「ノイズ」の読者を除けば、どんな音楽好きの若者でも、アジア各国の音楽事情についてまとまった知識を持っていることは稀だし、関心も薄い。英語圏の場合と逆に、

こんどはわれわれがアジアのポピュラー音楽を無視しているのだ。こんな一方的でいびつな関係は不毛である。なぜなら本当は、日本のポピュラー音楽も、西欧音楽を受容して変形した、アジア圏の音楽的な感性のひとつと見るのであれば、よく理解できるはずがないのだから。日本のポピュラー音楽を、アジア圏の拡がりのなかに位置づけること。それには音楽を、商業主義の流れに任せておくだけではだめ

だ。資本や情報を独占するアメリカを頂点に、がちり固まった音楽産業のヒエラルキーからわれわれを解き放つのは難しい。だから少しづつでも、音楽に関する情報を自覚的に、あらゆる方向に発信し、また受信していかなければならぬ。それを踏まえて初めて、日本のポピュラー音楽が、世界に占める独特な位置も自覚できる。それでこそ、日本のポピュラー音楽も、ポピュラー音楽研究も、やっとな本物になるのではないか。

ポピュラー音楽研究、日本発

はしつめだいさぶろう
橋爪大三郎

日本が、レコード、CDの売上げからみて、アメリカに次ぐ世界第2位の「音楽大国」であることはまぎれもない。折りからのワールド・ミュージック・ブームで、

レコード・ショップにもラジオ・TVにも街頭にも、世界のあらゆる国々の音楽がふんだんにあふれている。けれどもこの光景は、よく考え

street noises

POPULAR MUSIC IN JAPAN

この本の問い合わせは、日本ポピュラー音楽学会事務局・03・3726・1111
11内線2667(東京工業大学、橋爪研究室)まで

てみると、かなりいびつだ。日本のポピュラー音楽は、いったい世界にどれだけ知られているというのだろうか？ 英語圏の国々では、「YMO、ナニ？」松任谷由実「ダレ？」という状態である。「ピルボード」のヒット・チャートで、坂本九の「スキヤキ」がトップに輝いて以来ほぼ30年、日本のポピュラー音楽は世界的なヒットとまったく縁がないままだ。日本人が世界のポピュラー音楽にこれほど関心を持っている割に、日本のポピュラー音楽はまったく世界に知られていない。このギャップは、あまりに大きい。世界的にヒットしないのは仕

方ないにしても、少なくとも外国の音楽専門家には、日本にどんなポピュラー音楽があるのかくらい知っておいてもらいたいものだ。こうした情報の欠落を埋めるためには、世界に向け、日本のポピュラー音楽をきちんと紹介することである。——と、誰もが考え始めていた矢先に、うつつの紹介書が登場した。しかも嬉しいことに、出来栄が素晴らしい。今号ではぜひ、これを紹介したい。というわけで、表紙の写真を見ただけで知っているのが、恐らく世界で最初に英文で日本のポピュラー音楽を紹介するパンフレット「A Guide To Popular Music In Japan」(A4版26頁)だ。編集したのは、国際ポピュラー音楽学会日本支部(IASPM-Japan)。スウェーデンに本部を置く国際学会(81年創設)の日本ブランチとして、5年前から活動を続けている。執筆陣には同会の会員から、

細川周平、松村洋、小川博司、村田公一、北川純子、木村篤子、三井徹、河端茂、坪能由紀子、中河伸俊の各氏が加わっている。さて、このパンフレット(略称JPMガイド)は、「明治以前」「1945年以前」「1945年以後」「メディアと教育」の4部分に分かれていて、全部で41の項目からなる。通読すれば、予備知識が全然なくても、かなり正確な日本のポピュラー音楽の見取りがえられる仕組みになっている。どの項目も、いちばん大事なことから順に噛んでふくめるように書いてあって、配慮が行き届いている。基本に忠実なので、読んでいてすがすがしく、感動的でさえある。たとえば「1945年以後」の部分はどうなっているのか？ かなりのスペースを割いて紹介されているのが、「歌謡曲」「演歌」「戦後のジャズ」「ロック」なのは順当なところ。ほかに「歌声運動」「グループ・サウンズ」「ロカビリー」「アイドル」などの項目が並

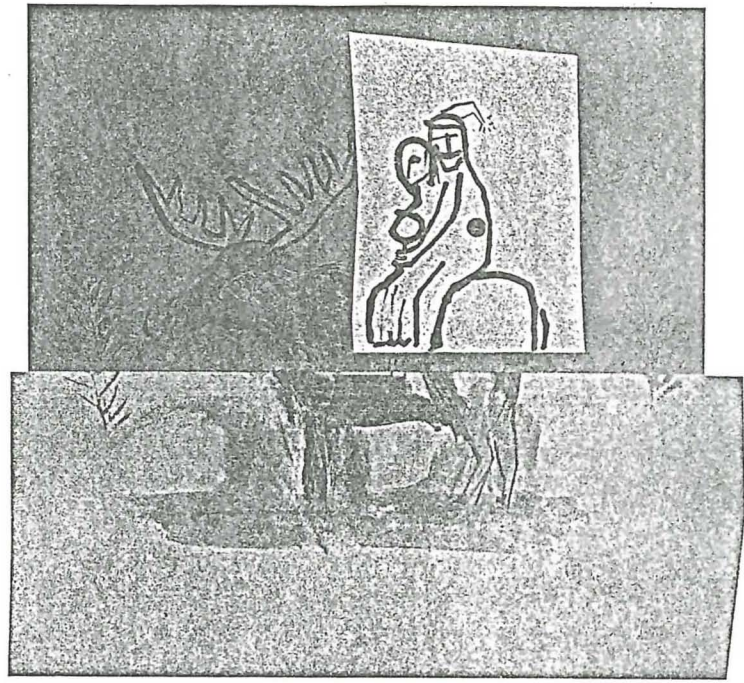
んでいる。「ロック」のさわりの部分を適当に訳してみると、日本のロックの歴史は、50年代半ばのロカビリーにまで遡る。60年代にベンチャーズ、ビートルズが来日すると、エレキを手にした長髪の若者バンドが沢山現れた。：彼らは、自前で新曲を作れなかった。：歌謡曲の作詞家・作曲家に曲を依頼せざるをえなかった。：70年代の終りにデビューした世良公則とツイスト、サザンオールスターズ、原田真一、チャーは、ヒット曲をつぎつぎ生み出して、ロックと歌謡曲の境界を分からなくした。：Vといった具合で、内田裕也からイカ天まで、60年代以降のロック・シーンを丁寧にバランスよくフォローしてある。その他の項目も、読めばなるほど納得し、そうだったのかと新鮮な驚きがある。日本支部の上部団体である国際ポピュラー音楽学会は、世界中の研究者のネットワーク作りを目指している。その一環として、研究



恋愛には クリスマスがよく似合う

橋爪夫三郎
PRESENTED BY
DAISABURO HASHIZUME

クリスマスがブームらしい。
大昔からあったものが、
今さらなんてブームなんだろう？



二人で一緒にいるのか。——これ、
なんか、大学生の入社が内定すると
きと似てませんか？ 要するに身柄
を押さえて、別のボーイ（ガール）
フレンドと一緒にいられなくしてしま
う。その突極のところが、ホテル
の缶詰めなわけだ。
だから考えてみると、これはきわ
めて政治的なんです。ただ一緒にい
たいのなら、誕生日でもいいわけだ
けど、誕生日は一人一人違うから、
相手を独占できたことにならない。
自分たちの関係がなにか曖昧なま
まで、どこまで固い絆で結ばれて
いるのかよくわからない、マニュアル
通りにつきあっているだけじゃない
か、ほかに本命がいるんじゃないか
という不確かな部分を確実にするた
めの儀式は、どうしても一斉にやる
必要があるわけです。バレンタイン
で馴れ初めた愛が、クリスマスで確

かめられ、やがて教会での結婚式
……。クリスマスは一種の通過儀
礼なんですね。
こうして、甘いクリスマスを通
すカップルが傍目にも目につくよう
になる。するとそれを勘違いして、
クリスマスにデートしてないと恰好
がつかないと思ってしまう。この
恋愛のなかまをさつちのけて、そ
れらしい形をととのえようとする。
こういうのは、えてしてマニュアル
男にブランド女ですから、こそぞと
いうスポットが軒並み予約で満員に
なったりするんです。
お葬式は仏教。初詣は神社。だけ
ど結婚式なら、何と云っても教会で
す。やっぱり愛情をテーマにする宗
教は、キリスト教ということになっ
てますからね。恋愛にはクリスマス
がよく似合う。二人の愛を盛り上げ
るのに、クリスマスはどうやってつ
けの舞台装置はない。

でもねえ、クリスマスって年一回
だけだし、そんなもの待っていない
いで、かまわず突き進むのが、本物
の恋愛だと思っただけ。
日本人は宗教そのものより
雰囲気の出るような儀式が好き
話を元に戻せば、クリスマスは、イ
エス・キリストの誕生日なんです。
ところで、キリスト教って、どう
いう宗教か知ってますか？ キリス
ト教徒はいつか何を信じればいい
のか。
こう質問したら「人間を信じる」
と答えた人がいましたけど、人間な
んか信じたらだめですよ。神を信じ
るのが、キリスト教徒の務めです。
でも、ただ神を信じるだけなら、
ユダヤ教やイスラム教だって同じだ。

どこが違うかという、イエスが救
い主（キリスト）であることを信じ
る、これがポイントです。人間とい
うのは、不完全な存在で、ほってお
くと自滅してしまふ。その人間を完
全な存在に生まれ変わらせるために
わざわざキリストがやってきた、と
信じているんです。
ではキリストは、どこからやって
来たか？ 神のところからやって来
た。神は唯一絶対の存在として、一
人てどこかに頑張っていて、人間を
救いたくても、おれそれと人間の前
に姿を現すことができない。そこで
「神には実は子供がいて、それが人
間のかたちになって人類を救いにや
ってきた」と考えた——これがキリス
ト教なんです。
イエスはどこから見ても、人間そ
っくりなのに、その正体は神である
なんて、なかなか理解できないこと
ですが、とにかくそれを信じる。そ
れには、イエス・キリストが人間と
してこの世に生まれた日、というの
がないといけませんね。クリスマス
は、そんなキリストの誕生日なわけ
で、キリスト教徒にとってはとても
重大な意味がある祭日なんです。
もっとも、神に子供がいるなどと
信じているのはキリスト教徒だけ。
ユダヤ教やイスラム教徒は、そんな
こと絶対に認めません。もちろん
クリスマスなんかやらない。キリス
ト教徒でもない人びとが、クリスマ
スを祝うのは、だからとても奇妙な
ことなんです。

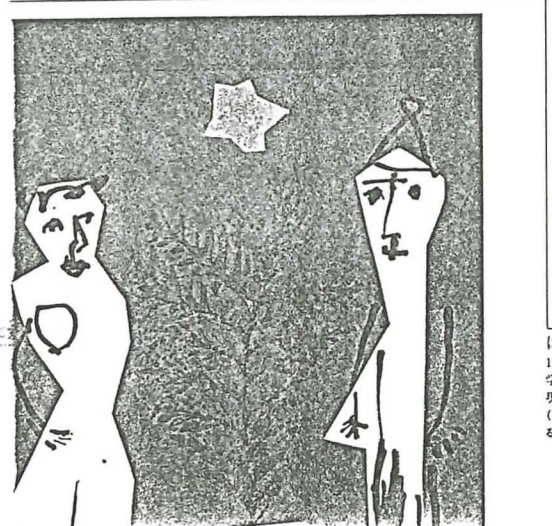
さつきも言いましたが、日本の場
合、宗教の棲み分けがあるんです。
人が死んだら仏教、お宮参りなら神
社、というように。結婚式は、明治
時代に神前結婚式というものが発明
されて以来、ずっと神道が仕切って
きましたが、最近では教会派が増えて
いる。
しかし本来、宗教は棲み分けたり
するものじゃないはず。キリス
ト教徒だったら、結婚式もお葬式も
全部キリスト教でやるのが本当。そ
れを日本人は、いろんな宗教をつぎ
はぎして、適当に雰囲気の出るような
儀式なら何でもいじやないかと思
っている。こんなことをやしてきた背
景があるから、「この数年、クリス
マスがブームです」なんていう、変
なことが起こるんです。まあ、よそ
の国だったら、考えられない話でし
ょうねえ。

ホームクリスマスの原体験が
今のブームを引き起こした
クリスマスがもともと、キリスト
教徒の祭日であることくらい、一応
みんな知っている。でもそんなこと
はどうでもよくて、一年を締めくく
る12月に、おいしい、馳走やケーキ
を食べたり、わいわい、プレゼントを
交換したりするのが、日本人のクリ
スマスです。
こういうクリスマスが一般化した
のは、実はそんなに古いことではな
くて、ヨーロッパでもだいたい19世
紀のこと。「近代家族」というもの
が成立して、クリスマスの日に家族
みんなの愛情を確かめあうようにな
った。赤い服に白い髭のサンタクロ
ースが子供にプレゼントを配り始め
たのも、この頃です。

こんな海の向こうの、ホームクリ
スマスの習慣が日本に入ってきたの
は、大正時代だった。郊外電車を通
動し、ターミナルのデパートに足を
運ぶサラリーマンのお父さんたちが
クリスマスにプレゼントを買って帰
るようになった。子供たちは喜んで
ひな祭りや七五三みたいな年中行事
がひとつふたつと思っただけです。
ハイカラな山の手の風俗として始
まったクリスマスも、戦後は不一家
のクリスマスケーキと一緒に日本中
に広まった。「たけし君、ハイ」に
クリスマスがやりたくてうまい、か
ない話が出てきますが、だいたい昭
和30年代には完全に定着したと思っ
ている。

子供にとってクリスマスは、プレ
ゼントがかかっている大事な日。親
に愛されているかどうかを確認でき
る特別な日です。
ところで、子供の頃、プレゼント
を持つてくるのがサンタクロースな
のかお父さんなのか、悩まされて
したか？ 小さいうちは、サンタク
ロースの神話を素朴に信じていら
れる。でもある日、その秘密は暴かれ
るんです。
私の姪なとい年になるまでサン
タクロースを信じていたの、「パパ
もママも私を騙してた」と大騒
ぎでした。父親や母親が働いてお金
を稼ぎ、プレゼントを買ってくれた
それ以外のサンタみたいな存在はこ
の世にいないのだ、と悟るのですね
そうすると、ほかにも秘密がありそ
うだと勘づいて、家族の性の秘密を
探りあてたりする。心理的な親離れ
のための、重要な儀式なんです、ク
リスマス。

で、親離れたあとの子供は、ど
うしたって家庭の外に愛情を探さな
ければならない。これが近代家族の
宿命なわけですね。年頃になって家族
からはみ出すいっぽう、行動の自由
時間の自由、それにお金を手に入れ
る。こんな自分、恋人からプレゼン
トをほしい、恋人からプレゼント
をもらいたい、と思うようにもなる。
ホテルを予約しないまでも、クリス
マスになるとかソワソワするの
は、子供の頃のホームクリスマスの
原体験になっているから。こう
いう下地があるので、クリスマスに
どうしろこうしろというマニュアル
があると、つい買ってしまう。
クリスマスは一人の愛を
確かめる通過儀礼
じゃあ何て、ホテルまで予約して



はしづめ・だいさぶろう
1948年、神奈川県生まれ。社会学者。77年、東京大学大学院社会
学専攻博士課程修了。89年より、東京大学工学部助教授。
現代社会の諸現象を多面的に分析する著書「仏教の言説戦略」
（勁草書房刊）、「はじめの構造主義」（講談社現代新書）などがあ
る。

イラストレーション—河原崎秀之
Illustration by Hideyuki Kawarasaki



エスクァイア時評

仏 教はどうして、葬式に因りするようになったのだろうか？
ある本にこう書いてあるのを読んで私は納得してしまっただけでなく、日本人は、死を穢れの一つとみなして恐れてきた。ところが日本に伝来した仏教は、徹底した合理主義の思想のため、死を恐れず偏見を持たなかった。そこで人びとは僧侶に、死に関わる儀式を任せようになったのだ。

インドの仏教は、厳格な出家者の宗教だから、世俗の活動と関係がなかった。もちろん、葬式なんかやらない。それが日本に伝わると、いつの間にか「葬式仏教」になってしまった。

だから裏を返せば、仏教が今日までずっと葬式を取り切っているのは、日本人が記万葉の昔から現代まで、死の穢れを感じる引きつっているからだ、ということになる。穢れをはらうために、祓禊をする朝シヤンなんかもその延長だ。

死の穢れを恐れていたのでは、人間が実際にどうやって死ぬかを、冷静に見極めることができない。

西洋医学や科学は、人体も物質にすぎないという、徹底した人間機械論の立場に立つ。この見方はキリスト教

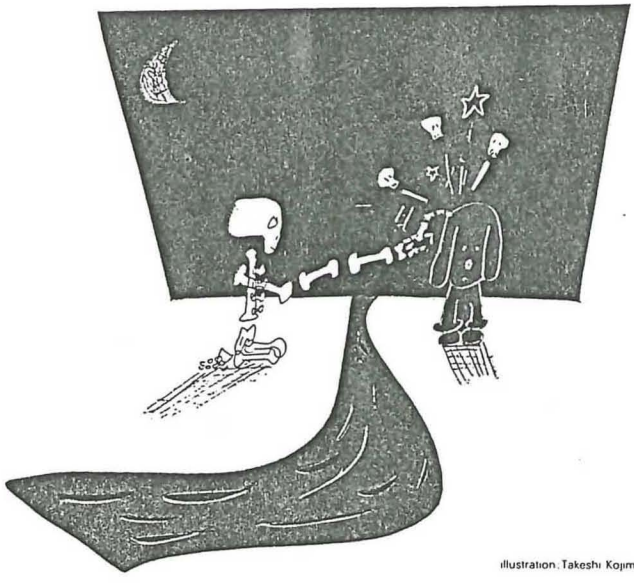


illustration Takeshi Kojima

もつと廻れば、古代ユダヤ教に由来するものだという。

外国人労働者としてエジプトで働かされていたユダヤ人たちは、ユダヤ民族の自覚を取り戻させることが、ユダヤ教の狙いだった。それのためモーゼは、エジプトの宗教を徹底的に否定した。

これに反対したユダヤ教は、死後の生活も霊魂の存在も一切信じないという、徹底した唯物論となった。

キリスト教は、ユダヤ教ほど徹底しておらず、霊の存在も認めるが、それらの霊はすべて、神の権威に服して死する。神の言うことを聞かない悪霊・死霊のたぐいは、エクソシストに退治されることになっている。

いずれにしても、これらの宗教の場合、信仰があれば死を恐れないのが正しい。だからかえって、人間はどのよう死ぬのか、詳しく検証しようとする態度がそこから生まれた。

キリスト教はあくまでも、生きていく神と人間たちの宗教である。死んでしまった人間たちは、神に赦されて復活しないところに加われない。

それに対して、日本の神々は、生きていくのが死んでいるのか、よくわからない。人間は死んで、神になったりもするが、その場合、ある意味で生きていることになる。その証拠に、食事をしたり、怒ったりする。

日本人は、生と死が断ち切られてい

ると考えるのが苦手らしい。身体と精神(靈魂)をまったく別々のものと考えるのも不得手だ。日本人の場合、身体は何かと生きていくと、いつの間にか精神のことになってしまふ。精神は何かと考えていくと、今度は身体のことになってしまふ——こういう指摘があったが、その通りだ。

これが「五体満足」の感覚に通じる。日本人の場合、身体の一部が欠けたりすると、その人の存在が何か完全でなくなつたと考えがちだ。遺体が損傷したり手足が揃わなかったりしても、家族がひどく気にする。死者がそのことによって苦しむと考えるのだ。屍体は屍体、ただの物体ではないか、と割り切るわけにはなかなか行かない。

日本人は、それ見たことかと思つた。生と死の境界が曖昧なのは、当たり前のこと。それをあえて「死」と割り切る必要もない、と思つている。

脳死臨終が先こう「脳死は人の死である」という中間意見をまとめた。これに反対した梅原猛委員ら4人は「脳死は人の死でない」という少数意見を發表した(朝日ジャーナル)6月28日号)。私が興味を覚えたのは、次のような見解が、この委員会の基調をなしたことだ。臓器を提供したいという強い意思をもつ人がいる。……命を承へたいという人がいる。……二人の意思の合致を社会が妨げているとしたら、それは罪ではないか。少数意見もこれを踏まえて「脳死を人間の死と認めないが、臓器移植を可能にする……日本の現状に応じた新しい法の創造が必要だ」とのべている。要するに、生と死の間に「脳死」という中間段階を作つて、臓器の抽出だけは認めること、というのだ。この少数意見が、国際日本文化研究センター所長の梅原氏によつてのべられているのが象徴的ではないか。

生きているような、死んでいるような。

——脳死と日本人の死生観——

橋爪大三郎 文
text by Daisaburo Hashizume
小島武 絵・タイトル文字
illustration and calligraphy by Takeshi Kojima

人間の生き死にを考えてきた日本人の伝統と、西洋医学は、だから系統がまったく別々だ。日本人は西洋医学を受け入れたが、それは西洋の形而上学や死生観に共感したからではない。西洋医学のほうととりあえず、病気をうまく治療できたからにすぎない。人間の死とは何かという問題も、西洋医学に任せ切らされた。

その西洋医学が、生と死ともつかない「脳死」を見つけて困っている。

はらものだ、さう、生と死ともつかない、脳死をどう扱うか、という問題が、脳死をめぐって、生と死ともつかない「脳死」を見つけて困っている。

わ が国の出生率が過去最低の1.53に落ち込んだというので、大騒ぎになっている。だが、果たしてそんなにびくびくする必要があるのでろうか？

主として経済的な観点から、出生率の低下が心配されているようだ。ある人は、人口が減るのでマーケットも縮小し、生産能力が過剰になるのではないかと心配している。別の人は、労働人口(生産者)が減る一方で高齢者つまり消費者が増えるという、あべこべの心配をしている。なんだか、議論が整合していない。

確かに、特定の年齢層にターゲットを射した商売、たとえば幼稚園や小学校は、もろに波をかぶるだろう。でも大学あたりなら、対応する時間的余裕は十分ある。また、一般の産業にどういう影響が及ぶかは、もう少し慎重に考えてみたいと言えない。

まず、1.53という数字自体に多少問題がある。これ(合計特殊出生率)は、一時点で複数の世代を輪切りにした数字。急に出生のパターンが変わったりすると、数字の上で、一時的に出生率が落ち込んだようにみえることがある。たとえば上の世代は、20代で産み終えたので、30代では産まない。下の世代は、30代で産む予定なので、20

代のいまはまだ産まない。なんていう変化の最中だと、かなり低い数字が出てもおかしくない。それなのに、1.53という数字がひとり歩きしている。

というわけで、本当に出生率が1.53まで落ち込んだのかは、あと何年か経過を見ないと何とも言えないわけだが、仮りに本当に低下したのだとしても、一向にかまわないではないか、というのが私の考えだ。

どうしても跡取りを産まなければならぬ事情は、はばなくなった。いまはそれぞれの家族が、夫婦の判断で、子供の数を決めている。その総計がたまたま1.53ということなら、それはそれとして尊重されるべきではないか。もし1.53に文句をつけたら、それは産まなければいけません、何百万人も見なければならぬ。いったいそれを誰がどういう権利で要求するのだろうか。そんなものは、放っておいたらいい。

その代わり、1.53になったことを前提にして、社会はどうやってそのショックを吸収すればいいのかを考える、それが話の順序というものだ。

ただ、ちょっと注意しておくべきなのは、産まないから産まないのか、産みたいけど産めないから産まないのか、ということ。本当は産みたいが、やむをえず産まない、という人も必ずいる。産まない理由はいろいろだろうが、まず、年齢・健康を含めた体力、それに経済力や、共働きなどライフスタイル、それに、住宅が狭いなどの問題だ。こうした問題は、どしどし改善すべきだ。でもそれで、人口がすぐ増えるとは期待するのは甘い。

育児休暇や児童手当で、保育所など施設を改善すると、効果があるかもしれない。1.53がそんなにシヨックなら、この機会に思い切つて充実したらい。出生率が上向くかどうかはともかく、少なくとも母親は大いに助かるはずだ。

さて、長期的にはやはり人口が減っていくのを覚悟しなければならぬ。社会・経済をどう運営すべきだろうか？ 社会はこれよりもっと大きな変動を、過去に何回も経験している。あまり悲観しないでいいと思ふ。

たとえば、戦争。戦争になると、消

費市場は一挙に冷えこむ。資源は軍需産業に集中投下され、国民は耐乏生活を強いられる。おまけに男子は徴兵されて軍人になり、戦死したりするわけだから、労働力も極端に減少する。1.53どころではなかつたわけだが、これほどの変化があつても、ちゃんと乗り切つてきた。それぐらいの余力はある。

出生率の変化による人口の変動は、戦争と違つて、かなり正確に予測可能である。だからつと対策が立てやすい。労働力人口が減り、高齢者がかりになつてしまふというのは、ほかの先進国もいすれ直面せざるをえない問題だ。その先陣を切るかたちになる日本は、そのモデル・ケースのつもりで頑張るのがいいと思ふ。

経済は労働力だけでなく、資源や、資本、技術によつて支えられている。出生率低下のあおりで労働力が不足すると、資源は金があれば買える。資本・技術を高度にすれば、経済体質はむしろ強化される。

ここで問題になるのがコストだ。機械があまり高価なあいだは、人間を使つたほうが安いから普及しない。それがある線を割り込むと、電話交換機や自動改札機みたいにワットと普及して、人間の労働を代替する。労働力が不足すると賃金が上昇するので、それだけ

技術革新に対するインセンティブが生まれる。願つてもないことだ。さういふいくつかの業界で、すでにロボット化が進行しつつある。生産力人口が激減するとしても、あと20、30年はあるので、その間じっくり準備をして、自動化に切り換えればよい。

企業の技術開発の担当者も、自分の老後を考えて、まじめに取り組んでほしい。子供に頼れば、国もあてにできないとなれば、体力が弱つた老後では機械にサポートしてもらつたかならないか。

こうして、産業の体質はどんどん強化される。シルバークア産業は日本の独壇場になるだろう。本格的なホーム・オートメーション革命だ。面倒なキーボード操作でなしに、口で命令すれば言うことをきいてくれるロボットたちの世界だ。

こう考えると、出生減・労働力不足こそ願つてもないチャンスのはずで、これをわざと迷子手はない。下手に外国から労働力を入れるのは、せつたの技術革新への圧力が活かせないから、得策でない。1.53ショック恐るに足らず。これが私の結論である。



エスクァイア時評



illustration Takeshi Kojima

1.53ショック 恐るに足らず。
橋爪大三郎 文
text by Daisaburo Hashizume

「幸福の科学」のシンクレティズム

橋爪大三郎

最近とても残念に思っていることがひとつある。7月15日、東京ドームに行きそこねたことだ。

宗教学者「幸福の科学」を主宰する大川隆法氏の「御生誕祭」に、その日、全国から数万人が集まったのだ。五百あまりの指導霊も、会場に降臨することになっていた。街角でもらった黄色いチラシには、3千円払えば入場できると書いてあったのに、ちよつと高いなあと思つてしまったのがよくなかつた。ところがその後、ご承知の通りの、「フライデー」廃刊をめぐる騒ぎだ。そうなることとまず、構成・景山民夫、司会・小川知子の「大川隆法IN東京ドーム」がどんなだったろうと気になる。「この日のために用意された、コーラス隊による合唱つき 勝利の歌」

「音と光のページェント」など文字の躍るチラシを見るにつけ、いかにも口惜しいではないか。

でもまあ、仕方がないやとあきらめていたら、10月末に今度はビデオ「信仰の勝利」が発売になった。ドームでの講演を収めた60分のドキュメントである。さつそく見てみたら、これがけつこう楽しめる。

ただし、「音と光」のほうは大したことなかつた。だからだらした入場行進。木に竹をつないだようなキーボードの演奏。ぱつとした混声合唱団。音楽的な盛り上がりや斬新な工夫は見当たらない。あり合わせの寄せ集めという印象だ。今どきのちよいと似たコンサートのほうが、よっぽど仕かけも凝っている。

だが、考えてみれば、これだけたり前なのだと思いついた。「幸福の科学」の教義がそもそも、これまで数ある宗教のシンクレティズム(二ごつた煮)なのだから。

水と油ほど違うキリスト教と仏教を、いったいどうやってつなぎ合わせたのか? おまけにイスラム教や、儒教、神道もミックスされている。この秘密を考えてみるほうがよっぽど興味ぶかい。というわけで、「幸福の科学」の教義の組み立てを、簡単に押さえてみよう。

まず根本は、霊の存在を信じていること。宇宙はもと、唯一の偉大な霊から生じた。この霊を、神とよぶ。大きっぱに言うとその霊が分かれて、星雲や天体や、地上の我々を生みだした。人間はもと、神のかけらなのであり、神性をそなえている。だから人間は、神の子なのである。

つぎに、霊たちのヒエラルキー(次元構造)と、転生輪廻を信じなければならぬ。

我々は地上の三次元世界に生きているが、その実体は天界の霊である。そして霊とは、修行を通じてその境位をどんどん高め、どこまでも神に近づいていくべき存在である。そのプロセスが、八正道であり、また愛の実践だ。

霊たちは修行のため、また愛の実践のため、何百年か何千年かに一度、地上に降りて来る。なかでも境位の高い霊たち(高級霊)が降りてきたのが、歴史上の偉大な宗教家たちである。そして霊たちは、この地上で、天界の守護霊、指導霊の指導を受けながら、活動する。——こうした霊界のほんとうの姿を知ることが「科学」であり、霊としての修行に励んで「神理」を体得することが我々の「幸福」である。だから、「幸福の科学」なのだ。

我々にはうかがい知ることのできない霊界の様子が、なぜ手にとるように分かるのか? それは大川隆法氏が、10年前に霊道を開いた(二霊と自由)対話できるよう

になつた)からだ。そうして彼が知りえたところによると、大川氏の前生は、ゴータマ・ブツダであり、そのまた前生はギリシャのヘルメスだった。そしてその本当の名は、エル・カンターレ、九次元の高級神霊であるという。

大川氏の指導霊は、イエス・キリスト。イエスが地上で活動していた当時は、逆に彼がイエスを指導していたのだという。こんな具合に、釈迦やキリストなど、よその宗派の教祖たちの霊と大川隆法氏が対話できてしまうのだから、理屈から言えば、どんな宗派もみな「幸福の科学」にとりこめる。なかなか楽しい発想かもしれない。

だがよく考えてみると、もちろんおかしなところがある。たとえば、輪廻からの解脱を果たしたわけだから、入滅したあとに「霊」が残るはずもない。仏教の正統教理から、大きく逸脱している。またキリスト教も、神と人間は比較のしようもないほど隔たつていて、という考え方だから、両者が互いに生

まれ変わつたり、人間の霊が修行してどんだん神に近づいたりするなどというのは、とんでもない考え方である。

そういう「細かなこと」を気にしなければ、「幸福の科学」の教理はわりによく出来ていると言つてもよい。すると逆に不思議になるのは、「フライデー」の記事になぜあれほど過敏に反応しなければならなかつたのか、ということだ。

「フライデー」は大川氏が「分裂症(興味)……鬱病状態」だったと書いてあるけれど、「分裂病で……鬱病」とは書いていない。そのあたりは用心ぶかい。

誰だつて調子の悪いときには、分裂症「興味」だつたり鬱病「状態」だつたりする。それに大川氏自身も、八本書は、単に地上に肉体をもつている私の小さな脳細胞から生み出されたものではありませぬ。霊天上界、九次元世界にある私の潜在意識から啓示を受けつつ、これを文字として、また私自

身の思想としてあらわしたものである。√(太陽の法)まえがき)と言っているのだから、彼の「地上の肉体」が、世間の規準で「病んでいる」と言われたからといって、本気で怒る必要はない。鷹揚に構えていたほうが「幸福の科学」の教義としても、筋が通つていたはずだ。

「幸福の科学」がこれだけ話題になつたのは、日本人がシンクレ

ヒエラルキーの快楽イロクニ

佐久間マイ

先日、某大手新聞社が出している週刊の動物雑誌を会社の昼休みにパラパラとめくっていると、同僚がつつと寄つて来て、「うん、やはりそういう本とかを読んで、自然環境とか、護つて行くようにしなきゃ、駄目よね、うん」などつぶやいた。私はそのゴタクを聞いて、あ、またか、と不快になつ

テイイズム(世界の空想的な調和)を大好きだからかもしれない。ワールド・ミュージックのブームもこれと無関係ではあるまい。

しかし、シンクレティズム(異質なものごつた煮)から、新しいものが生まれるだろうか。「大川隆法IN東京ドーム」の音楽に接する限りでは、何となく、あまり期待できないなと思つてしまうのである。

てしまった。何も私自身は地球の動物を死滅の危機から救うために、そんな雑誌を読んでいたわけではない。ライオンの交尾の写真を見て、うーん、凄いなあ、と感動していただけである。動物の本を読むだけで保護ができるなら世話はないだろう。第一、本気で地球環境云々を考えるのならば、高級紙